

を二段に切るとのへて、上句と下句とを相排對せしめ、圖はしめたり。下句は、萬葉集卷十

(一四〇)

朝がすみたなびく野邊に足引の山ほととぎすいつか來鳴かむ
とあるに、全く、相同じ。又、同集卷十八に、

藤なみの咲きゆく見れば時鳥なくべき時に近づきにけり

といへるに、其の意表裏して、殆ど、軒輊玄がたぐ、これは猶、多少の曲折あり。又、躬恒集の、

わが宿の池の藤なみ咲きしより山時鳥待たぬ日ぞなき

に比すれば、遂に優れり。姿高く、心ひろく、巧まざるが如くにして、底に、工あるは、古風を存せる處、上乘の作なりや。

結句、六帖に、今や來鳴かむとあり。景樹が、いつかは、少し、間のあるさま、今やは、其の時に臨みたるさまなれば、こゝは鳴くべき時節にむかへるなれば、今やの方正しといへる、一わたりは、さもと思はるれど、前にもいへる如く、咲かぬ筈の花の咲きたるにつけて、急に待つ心になりたる意なれば、いつかどあらむぞ、猶宜しかるべき。又、左註に、云々とあるは、例の采り難し。さる傳へもありしなるべけれど、更に、人麻呂の歌體にあらず、いたく後のものにて、平安遷都後の作なる事うつなし。

うづまに咲ける櫻を見てよめる

紀のごとさた

あはれてふ言をあまたにやらじこや春にれくれて獨さくららむ

(釋)うづま 卯月にて、舊曆の四月の異名なり。○あはれてふ言 あはれと感賞する詞の意、あはれは感歎の詞、うづまはといふの約。○あまたにやらじとや 多くの他の木に、願ち遣るまいと
いうてかの意なり。

一首の意は、あゝ見事なといふ、人の羨むる詞を、數多の櫻に願けて遣るまい、われひとり占領せうと思つて、わざと、數多の櫻の咲く春に後れて、珍しき時分に、獨この櫻は、咲くのであらうかとなり。

(評)卯月の遅櫻を見て、さる野心ある故に、遅く咲けるならむと、それが心中を推量せるは、隱微なる人情の消息を、物に託して洩らせるものか。結句、咲くらむにさくらをかけたなり。

題をらす

よみ人をらす

さ月まつ山ほととぎすうちばふま今も鳴かなむこぞのふる聲

(釋)○さ月まつ さ月は舊曆五月の異名なり。時鳥は、多く五月に鳴けば、おのが五月なともいひて、五月にならぬ内は鳴かざる物として、其の鳴くべき五月を、山の中に待居るものやうにいへり。○うちばふま ちは接頭語にて、勢を強むる語、はふまは羽振にて、羽叩きする事をいふ。振るを古く、ふまといへり。○こぞのふる聲 去年の舊き聲の意なり。

一首の意は、五月をおのが鳴く時として待居る、山の時鳥よ、また、五月にならねば、今年の

(一四三)

初聲は出されずとも、羽叩きして山から飛び出して、去年の舊聲なりとも、この卯月の今も、鳴いてもらひたしとなり。

(評)聲に新古の別あるべきならぬを、そをあるやうに巧めるが歌なり。後にも、

ここの夏なきふるしてし時鳥それかわらぬか聲のかはらぬ

又、躬恒集にも、

あたらしくてる月影に時鳥ふる聲まゝく鳴きわたるなり

などありて、時鳥に古聲をいふは、この集時代の前後に、専ら、流行せし思想と見えたり。又、さ月待つが、山にひそみ隠れ居る状なれば、それに對へて、うちはふきは、鳴きて飛び出づる形容をいへるにて、この語尤も、妙なり。今もは、おのづから、ふる聲に對へる響きあり。意詞曲折たれど、明晰にして、體格雄健なり。

伊 勢

さ月こは鳴きもふりなむ郭公またしきほどのこゑを聞かばや

(釋)○こは 來らばなり。○ふり 齎りなり。○またしきほど 未しき間なり。○ばや 希望の辭也。

一首の意は、時鳥は、五月が來るならば、屢鳴きやが、聲が舊臭くなつてしまはうワイ、それ故、鳴く時節ならぬ、また早いうちの聲を、聞きたきものだワイとなり。

(評)さらば珍しからむをの餘意あり。四月中に、郭公の聲を待戀ふる意は、前の歌と同じくして、

其の趣向を異にせり。理りこそ、細やかにいひ取りたれ、歌は遂に下れり。

よみ人あらず

五月待つ花たちはなの香をかけはむかしの人の袖の香ぞする

(釋)○五月待つ花たちはな 五月待つは、前の時鳥の歌なると同じく、橘も、五月に咲くものなればなり。然れども、前なるは、其の五月を待居る間の意、これは既に、五月を待つて、咲出でたるをいふにて、少し異なり。○花たちはな 橘を四五月の交、花咲く時につけていふども、又、橘のうちの一類にて、勝れて花の宜しき物をいふどもいへり。橘は密柑、金柑、橙、柚、柑子の類をすべていふ。

一首の意は、五月を待つて咲く、その花橘の香を嗅げば、今に忘れぬ昔馴染の人の袖の香が、存外するワイとなり。

(評)橘の木蔭を、け近く立馴らせる人の、うちまめり、なつかしく匂ふ花の香に、ふと、昔の人の袖の香を聯想して、詠めりしならむ。今すこし、猶豫あらば、昔の人の袖の香ぞ思ひ出でらるるとやうに、分別の語にも渉るべきを、只、それを嗅きたる瞬間の感じを、端的に打出でたるなれば、直に、袖の香ぞすると、斷言せらるゝなり。これぞ、この歌の佳處なるべき。春歌上に、「誰が袖ふれし宿の梅も」といへるも、同趣にて、只、描寫に、自他の相違あるのみなれど、こは天籟にて、人爲の工なき點を以て優れり。歌體古にして雅なり。弘仁天皇の頃の作か。香と

いふ語二つある。此の時代までは、同字の病を忌む事の、嚴ならざりしにも據るべけれど、猶、よく思ふに、橘の香と袖の香と、自然に、相對をなせるが如し。

○
いつのまにさ月來ぬらむあしひきのやま時鳥いまぞ鳴くなる

(釋)○鳴くなる なるは歎辭なり。

一首の意は、これはマア、何時の間に、五月が來たのであらう、五月を時として鳴く、山の時鳥が、思ひもかけず今サ、始めて、あれ鳴くワイとなり。

(評)これも、時鳥は、五月の節に鳴くものとして、節物風光の改まり行く事の、速なるを稽歎せるなり。秋部上に、

きのふこそ早苗どりしかいつの間に稻葉そまぎて秋風ぞよく

と詠めるも、立意は相似て、いまぞのま語、この眼目なり。其の突然なるを意外とする貌あり。これを、日頃待ちに待ちたるを、待つけ得たる意と説き做せるものあれど、誤解なり。さては、初句のいつのまにといへるに、照應せざるをや。歌の姿大らかなり。

○

けさき鳴きいまた旅なるほこしぎすはな立花に宿はからなむ

(釋)○旅なる 住み着かずしてあるをいふ。

一首の意は、今朝はじめて、山から里へ來て鳴きて、いまだに、旅がけにて居る時鳥よ、いつれ、宿を借るならむが、幸ひ、この庭に咲匂ふ橘に、宿は借りてもらひたいワイとなり。

(評)さらば、其の聲を親しく多く聞待べしと、頼み思ふ意下に籠れり。花橘のなつかしく打匂へる夕間暮、今朝はじめて來鳴ける時鳥の、猶あちこちと飛びめぐれるを見て、旅がけなる人のうへに思ひ做し、さて、旅人は、夕暮毎に宿借るなれば、それに擬へて、同じくは、この橘に宿らなむと希へる趣向面白し。但、今朝のと、今も飛びめぐれる時鳥とは、別の鳥なる事は、無論ならむを、一つものと見做したり。又、橘の在處は、詞のうへには見えぬをも、近く見て詠める状なれば、作者が庭前の物なる事は明らかなり。今は橘の類稀にて、昔の事情さとり難けれど、古へは、今の梅などの如く、大方、人の宿にはありしものと知らる。よりて、家移りなせしたらむには、必ず、其の宿に橘残りけむからに、故郷の軒の橘など詠み慣へり。されば、時に應じて、時鳥に詠み合すること、今、鶯に梅を結ぶが如し。奈良朝時代、盛に、愛翫せられし事は、万葉集にさる趣の歌多かるにても知られぬべし。

おこは山をこえける時に時鳥の鳴くをまゝてよめる

紀 友則

おこは山けさこえくれはほこしぎす梢はるかけ今ぞ鳴くなる

(釋)おこは山 山城國山科にあり。逢坂山近き地にて、そこに、清水寺といふ名刹あり。

一首の意は、音羽山を今朝越えて来れば、時鳥が、梢の方遙に、思ひかけず、今ヲ始めてあれ
鳴くツイとなり。

(一四六)

(評)夜深く京を立出でたるに、音羽山にて、やうく明け渡れる比、はからず、杜鵑の一聲を、若葉
さす梢の一方に、遠う聞きつけたる景氣、いはむ方なくをかしかりぬべし。これを、こゝもど
なる喬木の梢に、高う鳴きたる趣に見たる説われど、いかゞ。梢は、るかには、見渡しの梢の方
遙なる空にて、鳴ける意なるものを。又、今どの用法は、前の「いつのまにさ月來ぬらむの歌
と同じ。實景を只ありに述べて、簡古質樸なるは、延期時代の人の作には、稀に見る處なり。

時鳥のはじめて鳴きけるをまよめてよめる

そ せ い

時鳥はつこゑ聞けばあぢきなくぬこさたまらぬ戀せらるはた

(釋)〇はつこゑ はじめて鳴く聲をいふ。〇あぢきなく 俗のツマラナクの意。〇ぬし 主なり。
〇はた 當の義なり。さし當りたるにいふ。打つけなきいはむに似たり。

一首の意は、時鳥のはじめて鳴く聲を聞けば、はたとさし當りて、ツマラナク、誰れども其の
人の定まらぬ、戀心地がせらるゝツイとなり。

(評)彼れが初聲に、何となく、感情の起りて、昔今の人の事の、なつかしく思ひ出ださるゝなり。
萬葉集に、

いかでかもそこばく戀ふるほどさす鳴く聲聞けば戀こそまされ

神なひのいはせの杜のよふこ鳥いたくな鳴きそわが戀まざる
など、何につけても、感情のこころには、戀まざる端となる事を思へ。

二句、家集にも、六帖にも、鳴くこゑ聞けばとあり。これを正しかるべき。初聲は、意も調も、
少し急にして浮きたり。且又、この集は、歌にあらはれたる事は粗く書き、あらはれぬ事を委
しく書きて、歌の意を扶くる例なれば、歌に、既に、初聲とあらむを、煩はしく、詞書に、はじ
めて鳴きけると、重ねて書くべくもあらぬものを。

ならのいそかみ寺にて時鳥のなくをよめる

いそのかみふるさ都のほごぎすこゑばかりこそ昔なりけれ

(釋)ならのいそかみ寺にて云々 いそかみ寺は、大和國山邊郡石上イソカミの良因院をいへり。作者
住持の寺なり。上に、ならのとある、古來の集証なり。奈良は同國添上群にて、二里許も隔た
りたるを、引付けていへる事、不審といふべし。或は、石上へは、奈良を過ぎて行けば、遠か
らぬ程にもあれば、いひ續けたりといひ、或は、歌にいへる、ふるさ都は、奈良の故京をさし
たるなれば、安康帝の石上なる穴穂宮、仁賢帝の廣高宮と紛れぬ爲に、奈良のと添へたりとい
ひ、或は、平安の京となりては、石上あたりをも、廣く奈良といひならへり、譬へば、今の世
に、丹波國なる愛宕を、京の愛宕といふ類なりといひ、或は、奈良のは、全く、後人のさかし

(一四七)

らに加へしなるべし、歌は、石上の懐古なるをや、ともいひて、一決せず。○いそのかみふる
き都 いその上布留といふ續きにて、布留は、石上のうちなる地名なり。さて、それに舊きを
いひそへたり。

(一四八)

一首の意は、この石上の古き都跡は、何もかも、昔とは變りはてたる中に、只、時鳥の鳴く聲
のみがサ、昔の通り、變らずにあつたワイとなり。

(評)作者が住める良因院のあたりは、安康、仁賢二代の帝都の趾にて、衣冠の邸は、梵僧が、不斷
讀經の處となり、花草の苑は、野人が鋤き捨てし野らとなりて、前朝の事は、茫として、夢の
如く覺ゆる中に、なまじひに、感哀を催す時鳥の聲のみ、昔のまゝなるは、却りて、傷心の種
子なるべし。前にも、

ふる里となりにし奈良の都にも色は變らず花は咲きけり

とあると、同一の構想なり。又、万葉集に、

あを丹よし奈良の都はふりぬれども時鳥なかずあらず

これは、景物までも同じくして、全く、等類の歌なれど、詞に精粗の差あり。所謂、涼の葉磨
きをかけて、古撲を切瑳して、清新となしたるものか。

題を知らず

よみ人知らず

夏山になくはこゝろあはれ物おもふわれ小聲を聞かせそ

(釋)○夏山 夏季の山をいふ。○こゝろ 爰にては思ひ遣りのある心をいふ。

一首の意は、この若葉さす頃の山にて鳴く時鳥よ、汝も思ひ遣りの心が、あるならば、このや
うに、物思ひをして居る自分に、鳴く聲を聞かせてくるゝなよとなり。

(評)汝の聲を聞けば、いよゝ、物思ひが増して堪へられぬ故にといふ餘意を含めり。何か憂苦あ
る山里人の述懐にて、時鳥の聲を、悲哀なる聲と聞定めての趣向なり。されば、なくといへる
は、主腦の語にて、其の意、一首に亘れるなれば、打任せて、軽く看るべきにあらず。猶、其の意を
演繹すれば、泣く聲を聞かするな、貰ひ泣きがせられてならぬからとまでもいふべし。實や、
彼れが聲は、音短く節促りて、凄絶惻絶、人の心を傷ましむる調子なれば、漢土にては、
これを血に泣くとも、蜀の望帝の魂の化したる物とも、さまざま、哀なる、荒唐譚の作爲さへ
あれども、面白く賞美すべき意に聞做せる詩歌は、極めて稀なり。こゝにても、古くは多く然
りしにて、萬葉集にも、

時鳥なかぬ國にも行きてしがその鳴く聲を聞けば悲しも

など詠みたり。さるを、尋ねても聞かむと願ひ、初聲を夜を明かしても待つなどやうに、樂しみ
愛する方に詠めるは、この集以後の事にて、眞實の情には遠ざかれり。但、其の折柄の珍しく
て興せらるゝ意にも詠まむは、又何の難かあらむ。

ほこゝぎすなく聲聞けば別れにし故郷さへぞこひとかりける

(一五〇)

(釋)〇さへ 添ひ加はる意の辭なり。

一首の意は、時鳥のなく聲を聞けば、さまざま懐かしく思ひ出でらるゝ事多きが、離れて出で來たりし在所の事までがサ、戀しうわつたワイとなり。

(評)遊子の腸を斷つ不如歸の一聲は、げに、巴峽の猿の三聲にまさるなごべし。さて、さへの一語、聊か、商賈を費さざるべからず。そは、旅なる人の戀しき物は、まづ、故郷を以て第一に推すべきなるを、故郷さへど、第二にかとしていへる事いふかし。思ふに、この故郷は、作者の厭はしく思ひて、住捨てし處にや。さのみ懐かしからぬ筈の故郷までも、戀しう慕はしくなれる意と見ば、適ひぬべからじ。

時鳥がなく里のあまたあれはなほうごまれぬ思ふものから

(釋)〇ながなく 汝が鳴くなり。〇なほ 昔の意。〇うごまれぬ ぬは過去の助動詞。〇思ふものから 思ふは慕はしう思ふなり。ものからはもの故にの意にて、下に詞を含めたる格なれど、爰にては、早く譯して、物ながらと解しおくべし。

一首の意は、時鳥よ、汝が氣が多くて、鳴く里の、あちこちに澤山あれば、慕はしう思ふもの故に、疎む筈ではなけれども、やはり、疎々しう思はるゝワイとなり。

(評)われには、言よくわへまらひながら、他にも言ひかはす處數多ある人を、時鳥に喩へての作なるべし。伊勢物語には、賀陽親王桓武帝の皇子が、異心ある女に給ひし歌とせり。この集雜上に、月面白しとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによめると、詞書ありて、貫之の詠める歌、かつ見れど疎くもあるか月影のいたらぬ里もあらじとおもへば其の事情も、構想も、全く、同一なり。相通はせて心得べし。婉曲にして、諷意隱然たり。巧手妙手。

おもひうつるときはの山 思ひ出す時といふを、常磐山にかけたり。常磐山は山城國にあり。

〇からくれなるの 唐紅の如くにの意、紅は、からといふ美稱を添へたるなり。其の紅色を染むる時に、染草の水に衣を入れて、度々振動かして、色濃く染付くるより、下に、ふり出でといはむ序詞とぞたり。〇ふり出で 振立てといふに同じ。

一首の意は、戀しき人を思ひ出だす時といふ名の、常磐山の時鳥が、聲を振立て、サ、あれ鳴くワイとなり。

(評)戀人を思ひ出づる時は、音に立て、も泣きぬべき心地するより、常磐山の名にかけて、其處の時鳥は、うべもふり出でて鳴くといへるなり。故に、初句は、結句に關係ありて、用なき序

(一五二)

詞にあらねば、常磐山の時鳥ふりいでてぞなくの意とのみ解かむは、委しからず。常磐山といへば、緑深く聞ゆるに、から紅と打合へるが、自然けしきありて、句となれり。初句に、いづる、結句に、出でて、同意の語二所にあるは、不用意にして重なるものならむ。

(一五二)

あはしひきの山時鳥をりはへて誰れかまささるごねをのみぞ鳴く

(釋) ○ひづ ひぢと同語、浸りて濡れたるにいふ名詞なり。

一首の意は、鳴く聲はまても、其の涙は見えぬ時鳥よ、この自分の袖の、物思ひの涙の爲に、ピッシヨリ濡れてあるのを、汝の涙に借りてもらひたいワイとなり。

(評) もとより、物思ひある人の、時鳥の聲に、いよく、感哀起りて、涙のいたく溢るゝより、堪へずして詠めるならむ。猶、思ふに、この人や、時鳥とは反對に、涙は見えて聲はせぬ忍び泣に、人知れぬ物思ひに苦めるならむ。はの辭をうち重ねて、相對へたるも、さる下の意のありげなり。又、涙の見ゆる見えぬをいへるは、近きわたりの梢を渡りつゝ鳴く、時鳥を見て詠めるものと覺し。又鳴くといふ語の縁に絶りて、鳥の啼くにも涙をいへるは、前に「露の水れる涙云々と詠める類の聯想なり。

あはしひきの山時鳥をりはへて誰れかまささるごねをのみぞ鳴く

(釋) ○あしひきの 山の枕詞○をりはへて 時延にて、時長く續く事をいふ。居り延へといふ説もあり。○誰れかまささるとかは疑辭、とはといひての意。○ねを ねは聲を立つるにいふ。

一首の意は、時鳥が折も折とて、自分が物思ひをして泣居る處へ、引切りなく、いつまでも鳴き競ひて、誰れが勝つかといふやうに、聲を立て、サ、ひたすら鳴くワイとなり。

(評) 世に侘びて、山里に籠れる人などの作ならむ。打眺めたる山の茂みに、引切なく聞ゆる聲の、わが泣くに打合ひて競ひがほなるより、誰れかまささるとて、時鳥の鳴くやうに、有心に取做せるが一ふしなり。景樹が、このらの時鳥の、互に聲を競ふ事なりといへるは、結句の意をいかに見たるにか。すべて、音を啼くは、只泣くをいふにあらず、心を聲に交へて啼く意なれば、時鳥のうへのみならば、鳴くとのみはむぞよかるべき。これは、憂思ある人の、おのが身を引かけて、時鳥の鳴くをも、さる方に聞做したるなれば、人の啼くと、時鳥の鳴くを對へて、誰れかといへるなる事はうつなし。

この歌、再び、後撰和歌集に入れるは、三句、うちはへてとあり。

今さらに山へかへるなほごゝぎす聲のかぎりはわが宿になけ

(釋) ○今更に 今改めての意。○聲のかぎり 聲のありたけなり。

一首の意は、これ時鳥よ、汝も山より出で来て、折角里馴れたる事なれば、今改めて、山へ歸

(一五三)

ちくる、なよ、是非に、聲のありたけは、此方の宿に居て鳴き盡せよとなり。

(一五四)

(評)五月も更けぬれば、時鳥の餘所へ飛去らむとするを、もとの住處の山へ歸るものとして詠めり。何の事なく、一筋に思ひ入りたるに、彼れ時鳥を愛する情、深く顯れたり。以上の詠人老らずの歌ども、格調のみ高古ならず。延喜時代に近き作なるべし。
二句、六帖に、みやまに歸るとあり。

みくにのまぢ

やよや待てやま時鳥こごづてむわれ世の中に住みわびぬこよ

(釋)○やよや待て やよやは、俗にヤイノといふに似たり。對手を呼びかくる語。待ては命令法。

○こごづてむ 言傳をせうの意。○住みわびぬこよ 住みわぐんだといふ事ぞよの意なり。

一首の意は、山へ歸る時鳥よ、これヤイ、一寸待ッてくれ、山里人へ言傳を頼まうワイ、その言傳は、自分はモウ、この世の中に住みわぐみたる故、追付け、自分も、山へも籠らむと思ふといふ事ぞよとなり。

(評)この作者は、仁明帝の更衣にて、貞朝臣登を生めり。後に、登朝臣の母の過失に依りて、僧となりて、深寂と號せし由、國史に見えれば、言傳てむと思へる山里人は、山寺に籠れる、わが子の深寂をば、指せるならむ。實に、一旦の過失より、わが身も世に容れられずして、物思ひの絶えざるより、人知れぬ山の奥へも入らむと思ふ心の底を、時鳥につけて洩らせるなり。一

首の語調、迫りて窘しげなるは、まさに、歌の意に協ひて悲酸に耐へず。又、舊注、奥儀抄なぞの説に、時鳥は死出の山を過る鳥なれば、人などに後れて、世の中歎かしく思ひける時よめる歌にや。

なき人の宿に通はばほと、ぎすかけてねにのみ泣くと告げなむ
と、後にもあると、同意ならむといへれども、猶、前説を以て可とすべきに似たり。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた 紀 友 則

さみたれに物れもひをれば時鳥夜深く鳴きていづち行くらむ

(釋)○さみたれに さみたれは、普通梅雨の名稱となれど、こは、梅雨の降る頃を指していふ名なり。○いづち 何方なり。

一首の意は、梅雨の頃に、よろづ心細く、夜もくよくくと、物思ひをして居れば、時鳥が、夜も深けたるに、啼くく、さちらへ行くのであらうぞとなり。

(評)わ、心細き事よの餘意あり、この餘意、即ち、一首に亘れる觀念にて、梅雨の頃といひ、夜深けといひ、時鳥といひ、いづれか、物心細く、悲しき感情を惹起す媒ならざるべき。これ工まざる工にて、打見には、さしたる手のなきやうなるが、この風調の高尙なる所以なるべし。時鳥の歌にては、絶唱ともいひつべき、拾遺集なる。

鳴きすて、いづち行くらむ時鳥淀のわたりはまた夜深きに

(一五五)

の藍本なり。

夜やくらき道や惑へるはこゝろ過ぎすわが宿をしも過ぎがてに鳴く

(釋)○夜やくらき 夜の暗き故かの意。○道や惑へる 道を間違へたるかの意。○わが宿をしも

しは強辭、もは歎詞。○過ぎがて 通り過ぐる事の出来難き意なり。
一首の意は、この頃五月關にて、夜が開き故に、どちらへも行かぬか、又は、道に迷ひてさ
まよひて居る故か、時鳥が、所も多かるに私の宿をサ、マアいかにも過ぎて行かれぬやうに、
どちらへも行かずに鳴きて居るソイとなり。

(評)假令、夜の暗しども、時鳥の、道を惑ふべきならぬと、人間の慣ひに推していへり。初句と二
句とを、各別に對句に仕立てて、其の兩端を叩けるに、とさまかうさま、時鳥の心情を推察せ
むと勵むるさま見はれたり。さて、かく、この宿に鳴きたる時鳥は、おなじ時鳥なるか、はた
他の時鳥の入換りたるかは、不明なれど、一の時鳥として、理窟を設けて巧めるなり。しもの用法
注意すべし。特に取出す意の辭なれば、他に強くさし當つる餘意を生じて、即ち、所も多きに
わが宿をの意となるなり。

大江千里

やどりせし花たちをなもかれなくになど時鳥こそ絶えぬらむ

(釋)○やどりせし 宿を取りしなり。○かれなくに 枯れぬのの意。○なと 俗のナセなり。

一首の意は、宿をどりて居たりし橘も、また枯ればせぬのに、なせにマア、時鳥の聲が、一向
せぬやうになりたる事ならむとなり。

(評)橘を時鳥の宿と定むる事は、萬葉集にも見ゆ、前にも、「花橘に宿はからなむと詠めり。さて、
橘の枯れたるならば、宿る所なき故に、餘所へ行きたりとも思ふべけれど、枯れもせねば、時
鳥の鳴かぬやうになる筈はなきを、合点の行かぬ事かなと不審したるなり。橘の枯れぬ事と、
時鳥の聲の枯れて絶えたる事を湊合して、上下の句に對へて圖はしめたるは、後にも、
月見れはちいに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど
と詠めると、同一の手段にて、この作者の好める風體と見ゆたり。又、橘も枯れなくには、橘
の花の散らぬをいふなるべしと、廣蔭の説なり。これも趣ありて捨て難し。結句、六帖に、
きなかざるらむとあり。この意をもて初句を解すれば、去年宿を取りし橘の、いまだに枯れぬ
由なり。この方語勢強く、語調弛びなければ、全首に相應して宜しきなり。

きのつらゆき

夏の夜のふすかこすれば時鳥なくひこころに明くる春のよめ

(釋)○夏の夜の 文字をがの意なりと、宣長于秋等は解し、景樹は、いかにしてもこのまゝにて
は聞えず、頭本に、はとあるぞ正しきといひ、廣蔭は、結句のまの、めへかゝるのにて、體言

を連続せしむる意の辞ならむといへり。文字をいろはずして聞ゆれば、廣隆の説に従ふべし。
○ふすかと 臥すかとなり。○まのゝめ 明くといふ詞の枕詞なるが、こゝは、直に曉の意に用ゐたり。さゝがには、蜘蛛の枕詞なるを、直に、蜘蛛の事とすると同じ。

一首の意は、寐るかと思へば、意外にも、時鳥の鳴きたる只の一聲に、はやモウ明けてくる、夏の夜の曉なるかなとなり。

(評)さて、寐る間もなき程に短き事よといふ餘意あり。二句は、寐ルカ寐ナイカノウチニなどいふ如く、碌々、打ちも臥さぬさまにて、これ、秋の夜、冬の曉、幾度寐覺めても、猶明けやらぬに對へたる趣向なり。又夏の夜の、いかに短かければとて、時鳥の一聲のうちに明くる事あるべきならぬを、意を強めとじて、實に過ぎて誇張したるが歌なり。これを、一聲を待ちわたるまに夜の明くとも、一聲のみにて一聲と鳴かぬうちに東雲となれりともいへる説は、理に泥みて興趣を忘れたるものにて、論するに足らず。猶、この歌の風情體格を味ふに、恐らくは、角聲一動胡天曉などやうの詩句より、脱化點化されたるにはあらじか。下句雄渾なり。

みふのたゞみぬ

暮るゝかこ見ればあけぬる夏の夜をあかすこや鳴くやま時鳥

(釋)○あかすこや 飽かすといふてかの意、明かすをかけたなり。

一首の意は、日が暮るゝかと思へば、はやモウ明けてしまふこの夏の夜を、餘り残り多く、不満と思ひて鳴くなるか、あの山時鳥はとなり。

(評)むが飽かす思ふ心より、時鳥の鳴く意中をも、然る意に推察したり。又、明かすどかけたる方は、明けぬるを、なきて明かすと鳴くかと、詰問せるなり。この意を重く見る時は、狂歌に近し。故に、詞を只文なしたるばかりの意と見て、飽かすを本義に采るを、穩なりとす。

紀 秋 岑

なつやまにこひしき人やいりにけむこゑふりたてゝなく時鳥

(釋)○こゑふりたてゝ、聲を高く張上げてなり。

一首の意は、この夏山に、戀しう思ふ人が、籠りてままひしならむか、頻にこの節、聲を張あげて、時鳥は鳴くはとなり。

(評)戀に泣かるゝは、人情の常なるより、夏山になく時鳥を聞き、其の山中に、彼れが戀しむ人の籠りつらむと、時鳥の心中を揣摩したるなり。さて、山に入るは、世に侘びて山中に住居するも、出家遁世して山寺に入るも、種々ありて、いづれと定めたる事はなけれど、殊に、この頃の慣習には、一夏修行の爲に、世を遁れ入る人あれば、そを戀ひ悲む人の歎きに思ひよそへて詠めるか。新撰万葉に、この歌に合せて「一夏山中驚耳根。郭公高響入禪門。とあり。

よみ人ゑらす

こぞの夏なきふるとしてし時鳥それかあらぬかこゑのかはらぬ

(釋)○なきふるとしてし 澤山に鳴きて珍しげもなくなりたるを、鳴さふるといふ。てしは、過去の

動助詞を打重ねたるもの。○あらぬか。それにはあらぬかの意。○聲の。聲がなり。
一首の意は、去年の夏、頻に鳴きて、古臭くしてしまひし時鳥の聲が又聞ゆるが、あれは、去年鳴きたりし時鳥か、それではなくて別の時鳥か、いづれも分らぬぞ、聲が第一、去年のまゝと變らぬワイとなり。

(評)時鳥毎に聲は同じく、又、年によりて、聲に新古の別ある筈もなきを、其の理趣を打越して、ドウシテモ去年ノテアルと、斷言せぬばかりにいひ詰めたる痴意の、歌になれるなり。前にも「今も鳴かなむ去年のふる聲」と詠める類なるべし。四句、句中句ありともいふべく、同じ語法を折返して、二段に切調へたれば、いとも、力強く聞ゆるに應じて、結句、旨くおき得たり。これを若し、聲を同じきなどいはいはむか。上來の語勢、忽ちに、滅殺し、頓挫して、尾枯れとならましを。

時鳥の鳴くをきよてよめる

つらゆき

さみたれの空もどろろに時鳥なにを憂しこか夜たゞ鳴くらむ

(釋)○空もどろろに。空もドンドとの意、どろろは響動するをいふ。もはサヘモの意なり。○夜ただたいは直の義にて、宵より曉まで、直に、引續きたるを、夜たゞといふ。俗の夜通しにかなじ。

一首の意は、梅雨の空も、どろろと鳴り響くはどに、時鳥は、何事を憂いと思うてか、あのや

うに、夜通し泣くのであらうぞとなり。

(評)天地の寂寥を破りて、梅雨の闇の夜空に、うち頻りつゝ鳴渡る時鳥の、悲涼凄愴なる聲は、よもすがら、獨起き居る愁人の、斷腸に堪へざる處、坐に、同情を寄せて、如何なる憂き事ありてか泣くと、不審もして見たくなるなり。又、岩もどろろに瀧の落つるなどいふは常なれど、時鳥の聲は、さほどの大聲にもあらざるを、空もどろろにといへるは、其の頻に鳴く由をば、誇張したるもの。立意は何となければ、この誇張と、かの疑問と相俟ちて、其の意を強めたるに、不言の妙味の生ずるを見る。

さぶらひにて、そのこともの酒たうべけるに、召して、時鳥待
つ歌よめごありければよめる、
みつね

ほこゝぎす聲も聞えず山彦はほかに鳴く音をこたへやはせぬ

(釋)さぶらひにて云々。さぶらひは、禁秘抄に「下侍三間、有炭櫃四面敷懸、號侍臣亂遊所也。云々、酒宴等於此所行之」とある如く、禁中にて、五位六位の人達の溜り居る所を、侍所とも、下侍ともいふ。そのこは男子にて、主上より、五位六位の人々をさして宣ふ語なるが、此の集は勅選にて、叙覽に供ふるものなれば、其の語を以て書けり。酒たうべのたうべは、俗言の食べと同じ。さて、詞書の意は、殿上の侍所にて、侍臣等の酒宴しける時に、躬恒を其の座に呼出だして、時鳥を待つ歌を詠めと命じければ、躬恒の取あへず詠めるなり。この召してを主

上の御前に召したるやうに解ける諸註は當らず。召すは天子に限らず、尊卑兩者の間には、汎く用ゐらるゝ詞にて、躬恒は、當時、甲斐少目といふ、極めたる淺き官位の者なれば、殿上人の詰所なる、下侍に呼びしは、即ち、召すといふべきなり。若し強ひて、主上の召したる事とせば、歌詠めどありければとあるを、いかに、解釋せむとするか。餘りに、失禮の書體ならずや。前後の例を推すに、主上の御詞には、必ず、仰せ云々とあり。秋部上に「寛平の御時、七日の夜、うへにさふらふをのこども、歌奉れ、と仰せられける時、人にかはりてよめる、といふ詞書を見合せて心得べし。○山彦 こだまなり。反響をいふ。山の靈ありて物の聲に應ふる如くなれば、男神の名稱なる日子を添へて呼べり。○やはせぬ 前にいへり。

一首の意は、待てども、時鳥のこゑがマア聞ぬワイ、なせに、山彦は、餘所にて鳴く聲をなりとも應へて、此處へも響かさぬぞ、應へて響かせて、聞かせさうのものにとなり。

〔評〕献酬數巡小夜更けたる折柄、時鳥も啼出でぬべき、五月の空のけはひなれば、平素、歌詠むといはれたる躬恒を、この座に呼出でて、待つ歌詠ませて、酒の肴とせしは、時に取りての、殿上人等の風流なるべし。時鳥の鳴かぬあまりに、應へぬ山彦を恨み咎めたるは、客を借りて主を形する筆法にて、待つといふことを詞に顯さずして、其の鳴くを待戀ふる意隱然たるは、流石に、老練の手際なり。躬恒ならでは、誰れか能くせむや。當夜の入興、さもと思ひ遣らる。

三句、顯本に、あま彦とあり。山彦に同じ。

山に時鳥の鳴けるをきよてよめる つらゆき

時鳥ひこまつ山になくなればわれうちつけに戀ひまさりけり

〔釋〕○ひとまつ山 人を待つといふに、松山をかけたなり。松山は松の生ひたる山をいふ。名所には非ず。○うちつけ 突然と急にの意なり。

一首の意は、時鳥が、人を待つといふ名の、この松山に、あれあのやうに鳴く故に、自分もさし當りて、俄に、人を待つ心になりて、戀しう思ふ事が、これまでよりは増さつたワイとなり。

〔評〕戀人を待ちつゝ、詠め入りたる夕暮の程、處も多きに、軒端の松の木山に、彼れが悲哀なる一聲を聞付けたらむ心地、げにやいかなるべき。山に生ひたるまつに係りて啼くは、身に摘まされて哀に、これまでとても、思はざりしにはあらぬぞ、端的に、感情の切迫して、われも泣きぬばかりに、人の戀ひしくなり増れるなり。人まつ山は、既に、春歌上の「白妙の袖ふりはへて人の行くらむ、といふ歌の處にていへる如く、この作者が、慣用の語法なるが、大和物語にも「君まつ山の時鳥と詠める歌あり。恐らくは、これを点化したるならむ。

はやく住みける所にて時鳥の鳴けるを聞きてよめる

たゞみね

むかへや今も戀ときはこゝぎす故郷にとも鳴きて來つらむ

〔釋〕はやく住みける所 以前住みける所にて、即ち、故郷なり。○むかしへ 昔方なり。へはいに

しへ、行方なごのへと同じ。

(一六四)

一首の意は、住馴れし昔の事が、今でも戀しいのかして、あの時鳥が、所も多いに、自分が、昔、住居をしたる土地にサマア、鳴いて來たのであらうとなり。

(評)わが昔戀しくて、故郷を音づれたるより、時鳥の來鳴ける意中をも、同情に推察したるは、作者の狡獪なる處にて、畢竟は、わが意中を、時鳥に託して、うち出でたるなり。しもの餘意は、前の「わが宿をしも過ぎがてに鳴く、の處にていへるが如し。處も多きに、軒には忍草生ひ、垣には蔦かづら這ひ纏りて、露けき野原と荒廢せる、故郷のあたりには、わざ／＼來りて鳴音を洩らす時鳥は、げに、這般の心ありげなるかな。

時鳥の鳴けるをまゝてよめる

み つ ね

時鳥われこはなごに卯のはなのうき世の中になまわたるらむ

(釋)○われとはなしに 我れには非ざるにの意、我れは作者自身なり。○卯のはなの 下に、うきといひ出でむ序なり。○鳴さわたる 時鳥の鳴き渡るは、空を渡るなれど、それを自身の泣きて、年月を経過するにかけていへり。

一首の意は、自分は世の中の憂きに堪へで、泣きつゝ、月日を亘るが、時鳥は、自分と同じ身にもあらぬに、何故に、卯の花の憂いと名のつく世の中に、暗暮すのであらうぞとなり。

(評)おのれを極めたる憂き身と定めて、時鳥の鳴渡る所以をいふかしみ、彼れを主とし、おのれを

客として、相對比して姿致を取れり。卯の花の憂き世と疊み重ねたる、聲調のなつかしさも、萬葉集卷十に、

うぐひすのかよふ垣根の卯の花のうき事あれや君が來まざぬ

とある、三四の句を踏襲せり。但、萬葉のは、全くの序詞なるを、これは、時節の景物を借りて、時鳥の句としたれば、細やかにうるはし。これぞ、此の頃の歌風なるべき。又、何故にといふ語を、句中に挿みて聞くは、例のらむ留めの一格なり。

はちすの露を見てよめる

僧 正 遍 昭

はちす葉ののりぞりたまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

(釋)○はちす葉 蓮葉なり。○たまぬ 染まぬなり。○なにかは かは疑辭、はり調を強むる爲に添へたる辭なり。反動の辭と見るべからず。

一首の意は、蓮は泥中に生ひたちながら、其の泥水の濁にも染まぬはどの、潔白なる心を以て、何故に、あのやうに、葉の露を玉として見せて、人をば欺く事かとなり。

(評)法華經の涌出品に「不染世間法如蓮花在水」とあるをも取合せて、初二句は詠めるにや。桑門の作者、おのづから、さる準據あるべし。又、濁にたまぬ心は、蓮の心なれば、初句は、蓮ののみいひて事足りぬべきを、露の置くよすがにもあれば、熟語として、蓮葉のと連ねたり。猶、この事委しくは、春歌上。

宿近く梅の花うらるゝあぢきなくまつ人の香にあやまたれけり

(二六六)

とある歌の處にていへるを見るべし。覆盆の如き立葉のうへに溜れる露の、宛轉として、皎潔なるより、見る人の、怪しく、白玉かと思ひ違ふるを、却りて、蓮の心ありて、露を玉と欺くやうに、擬人して、詰問したるが、奇巧を弄せる處にて、落想、人の意表に出づ。この種の想は、眞摯の情にこそ乏しけれ、氣韻こそ高からざれ、また、一種の感興ありて、面白しや。これ、この僧正の獨壇なり。

月のおもしろかりける夜曉方によめる

ふかやぶ

夏の夜はまた宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やとるらむ

(釋) ○また宵ながら または俗言の意と同じ。宵は初夜をいふ。ながらは茲にては、まゝにといふに似たり。接尾語。○雲のいづこに 雲は立まふ雲にはあらず、雲井などいふ雲にて、空の何處にの意なり。

一首の意は、夏の夜は短きものにて、また更けもせぬ宵のまにて、はや明けて行くのを、かくては、あの月は、所詮、例の西山まで行渡る間はあるまじ、さすれば、空の何處に宿を取りて、隠るゝ事であらうぞとなり。

(評) 端居つゝ、涼夜の月を見耽りたるうちに、早くも、明方になれる一時の驚きに、道理を滅却し

して、深夜なしに、宵のまゝに明けぬと、速断せる、痴意穉氣は、やがて、夏の夜の短き事をいひ顯はす、誇大の言語となれり。又、曉方の月は、大抵、山の端に見馴れたる心より、今、見明したる中空の月に對ひて、かく、突然と、間もなく明けては、月は空の何處に宿らむとすらむと、覺束なみたる、これらの痴愚の意は、即ち、詩趣の要素を成すもの、深く味ひて、其の消息を悟るべし。立意新奇なれども、尖巧に傷らず、姿も清げに、長けも高く、語調またすらくとして、流滑なり。流石に、元輔が父、清女が祖たるに愧ぢざる伎倆。

隣より、ごこなつの花を乞ひにおこせたりければ、をこみて、

この歌をよみてつかはしける、 みつね

塵をたにするじごぞ思ふさまじより妹ごわがぬるところ夏の花

(釋) 隣より云々 とこなつは撫子の一名なり。夏のうちより、秋の末までも咲く花なれば、夏を常しなへにする意にて、常夏といへり。この集以後の詞なり。こひにおこせは、貫ひに使をよこせしなり。○するじ 置くまいの意。○妹ごわがぬるところ夏 妹ご我が、夫婦共寝をする床といふに、常夏をかけたなり。妹は妻をいふ。

一首の意は、手前の常夏は、花が咲いてからこの方は、塵をさへどまらせては置くまいとサ、思ひますツイ、其の理由は、妻と手前が、中よく寝る床といふ、其のごと夏の花なれば、大事に存じましてといへるにて、これ程、大事の物なれば、折角の御所望にはあれど、枝を折りて、

(二六七)

進上申す事などいともなり難しといふ餘意を含めり。

(評)他より物を請求所望せられたる場合に、極めて、其の物の大事なる因縁を説くは、即ち、間接に、謝絶の意味を表するものにして、この手段は、吾人が、日常の交際間に於て、屢、利用せらるゝを見る。かく、直接を避けて間接に、露骨を厭ひて婉曲に就く所以のものは、これに依りて、他の感情を害せざらむと、勵めて、其の辞令を巧めるなり。又、夫婦間の疎くて、相住まぬ時は、其の床も枕も、取出す事なければ、おのづから、塵の置くもの故に、古へより、床や枕やに塵を詠み合せて、夫婦間の愛情を歌へるが多かり。これも、其の意にて、他に斷りやうもあるべきを、夫婦中のよき處を見せつけぬばかりの惚話は、餘り、手酷しいはざるべからず。以て、其の隣家の人は、極めて、隔てなき間柄の人なるを想ふべし。詞書も、さる間柄なるを知らせむとて、わざと、隣よりと、ことわれるなり。又、詞書に、をしてみて云々となりて、其の花を遣はすとはなけれど、惜みながら、戯れに、この歌を詠み添へて遣はし、ならむと、事情を揣摩したる、上田秋成等の説は、さる事と覺ゆ。常夏のとこの一語を主眼として、それを夫婦の床に准へて、花のなつかしき趣を見せ、さて、床の縁によりて、塵をだに据るじといひて、極めて、大事なる由をことわり、まして折る事はなり難しとの餘意を含めたるは、恰も、一挺の棧より、千尋の蘭絲を抽出でて、組織したる匹練の如く、まかも、絶つて、補綴の痕なきは、老手といふべし。三句は、初句の上にかけて聞くべし。又四句より五句へのいひかけは、ようせずは、卑しげに聞ゆるを、これは自然にして、節立たねば、却りて、簡潔の要を得て、いと

なつかし。六帖に、同人の歌、

妹どわがぬる床夏の花なればなべて人には見せむものかは
とあるは、この前身か。委碎け、措辞露骨にして、塵をだにと打出でたる、妍麗豊美なるに及ばざる事遠し。さるを、景樹は、其の塵をいはむとする方に引かれて、なべての人に見せじといふ、初めの主意は、傍になりて、よくせずは、然は聞取り難きまでなりと難じて、六帖のを、をかしと定めたるは、いかい。この兩首は、全然、同一のものにわらず。六帖のり、なべての人に見せじの意、この集のは、塵をだにするぬ大事の物ぞといふ意にて、語に分すあるをや。單に、形貌の似たるにより、猫を以て、虎を律する事勿れ。
三句、六帖に、植ゑしよりとあり。

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋とゆまかふ空のかよひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ

(釋)みな月 陰曆六月の異名なり。○ゆまかふ 往き交ふにて、さまじくに行ちがふ態なり。○かよひ路 通路なり。○かたへ 片方なり。
一首の意は、今日暮れて行く夏と、明日来る秋との、往かふ空の通路は、その秋の通り来る片一方は、涼しき風の吹くであらうかとなり。

(評)既に、夏の果て、秋になるを、往きかふと擬人したれば、其の縁にて、通路といひ出だせり。

もとより、形ありて、人の往來の如く目に見ゆるものならねば、空中を行くものと定めたるは、適當の想像なりや。さて、この道路の、秋の來る片方の、涼しき風を思ひ遣りて、こゝもとにも、其の風の吹落ちて來らむことを待望ひ意、言外にあらはれたり。想像の工は、空中の樓閣にも比すべくして、猶、浮泛ならず。さるは、其の歸着を實情に覓めなければならむ。三句、六帖に、通ひ路にどあるは、調つまりて、意も劣りざまなり。

(170)

明治三十三年十二月廿五日印刷
明治三十四年一月一日發行

全五册
第一定價金四拾錢

著者

金子元臣

東京市本郷區弓町二丁目十二番地

發行者

三樹一平

東京市神田區錦町二丁目十番地

印刷者

多田榮次

東京市神田區小川町一番地

印刷所

愛善社

東京市神田區小川町一番地



發行所

東京市神田區錦町二丁目

明治書院

はつ日影

本號に限り定價金拾錢 郵税金壹錢
國文學毎月一回十日發行●一部五錢
郵税五厘●一ヶ年分郵税共六拾錢

「國文學」は國文の振興を圖らんため生れ出でたるものにて、每號斯道の名家の美文、韻文、論文、及、廣く江湖より募集したる和歌文章俳句を掲ぐ、第廿五號は第三回の新年に相當するを以て「はつ日影」と題し、紙數を八十頁に増加し、特に名家の寄せられたる傑作を以て滿たす。

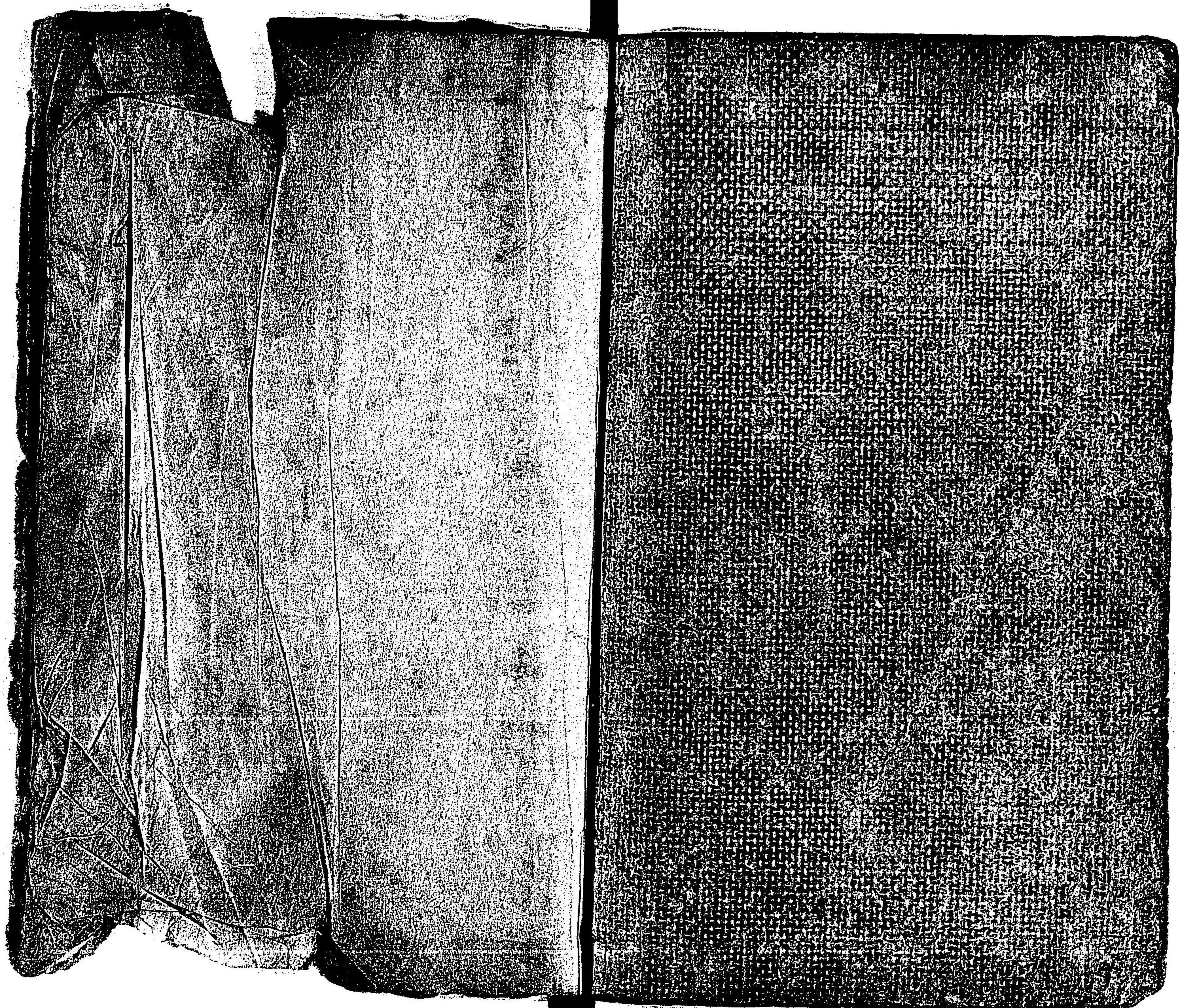
はつ日影目次

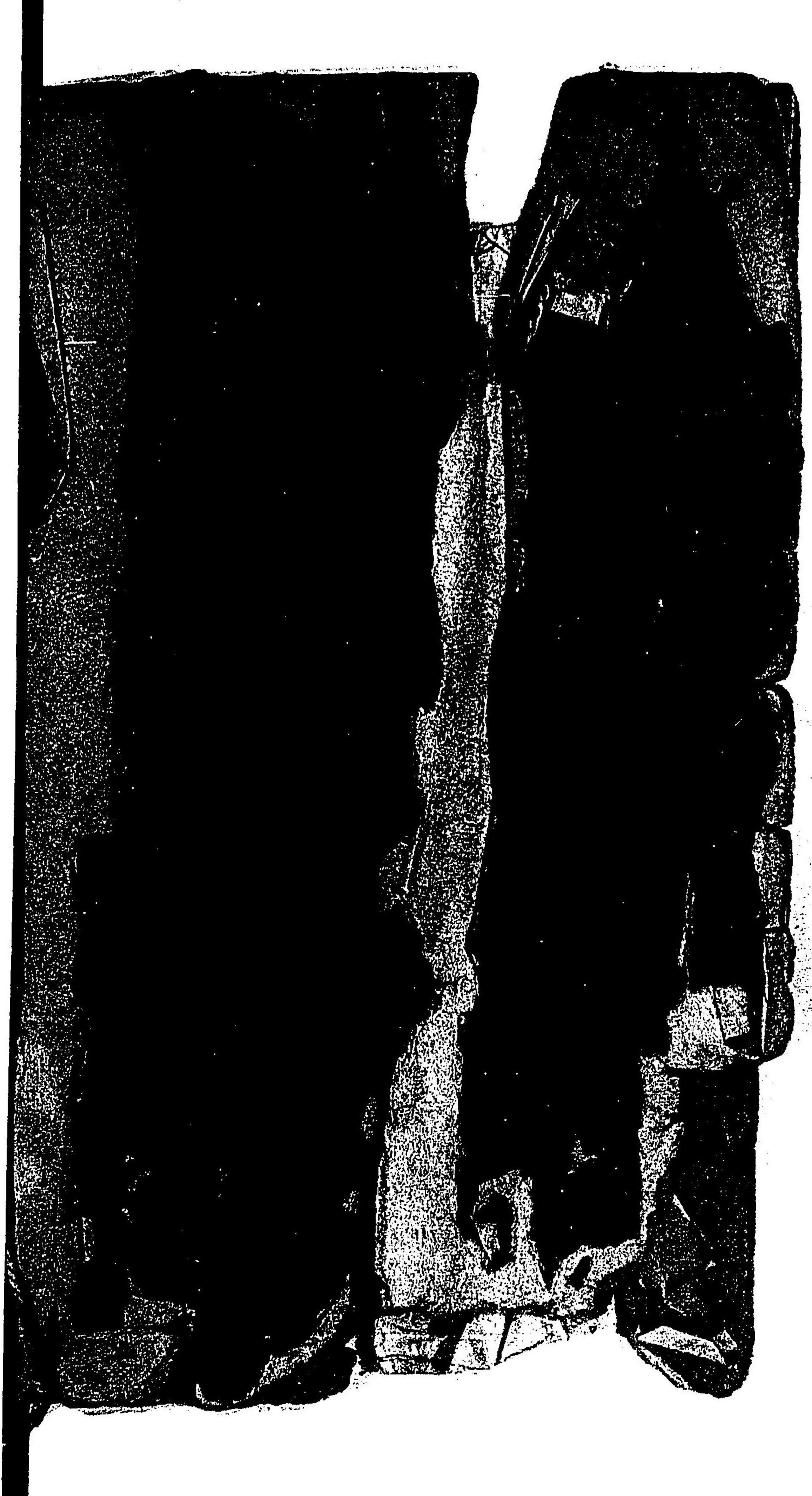
萩の家日課歌題……………	落合直文	茶煙……………	金子薫園
末葉のやどり……………	文學士 内海弘藏	一喝錄……………	文學士 大町桂月
やぶれ笠……………	興謝野鐵幹	今樣摘釋……………	金子元臣
關北の雪……………	文學士 久保天隨	藜藿集……………	栗島狹衣
アストン氏の日本文……………	文學士 佐々醒雪	新年雜詠……………	文學士 武島羽衣
學史を讀む……………	河東碧梧桐	新年の吟……………	渡邊文敏
奈良道……………	佐々木信綱	諷刺文學……………	吞宇宙
伊豆百首抄……………	堀江秀雄	謠曲の文……………	半雲生
國歌の將來……………	服部躬治	國文學者に對する局外觀……………	井ノ口眞證
玉たれ柳……………	落合直文	三十三年文壇概觀……………	一記者

發行所 東京神田錦町 明治書院

187

159





187
159

085955-001-4

187-159

古今和歌集評釈

金子 元臣/著

M34-41

DBD-0575



187
159